八幡様のじゃがもこじゃんと長倉塚

―柿岡小ふるさと学習一・二年生 読み聞かせ原稿―

ドーン、ドンドン、ドーン。雲一つない青空に、白い煙を残して花火が鳴りました。鳥居の前には、大きなのぼりが立てられ、秋の風に、はたはたとたなびいています。境内には綿飴売りやアイスボンボン売り、やきそば売り、お面売りなど、鮮やかな文字が染め抜かれた屋台が軒を連ねています。

「おれは、おもちゃの屋台で銀玉鉄砲を買うど。」

「おれは、かんしゃく玉の銀玉鉄砲だ。」

「おらは、まずたこ焼きを食うべや。」

子どもたちは大はしゃぎで、それぞれお目当ての屋台に群がっています。

毎年旧暦八月十五日の十五夜とその前日に、柿岡荒宿に鎮座する八幡神社では、太々神楽を奉納します。神楽とは、自分たちが住んでいる土地の守り神にささげるお囃子にあわせた歌や踊りのことをいいます。太々神楽は午後六時から十一時頃まで演じられます。昔は一晩中行われていたといいます。この神楽を見物するために地元の人はもとより、近郷近在より見物の人たちが集まり、たいそうな賑わいをみせます。また、十五夜ということで、美しい月を観賞しながら演じられる太々神楽ですが、神楽が始まると不思議に雨が降るので、いつのまにか「雨乞いの神楽」といわれるようになりました。

太々神楽は十二の演目で行われます。一座の国堅（くにがため）の舞から始まり、二座の老翁（おきな）の舞、三座の天狐種嫁（てんこたねがし）の舞、四座の龍神（りゅうじん）の舞が演じられます。そして、五座の赤鬼・地法（あ

かおに・ちのり）の舞になると、見物の人たちはざわざわと神楽殿の近くに寄っていきます。この舞は「厄除け餅まきの舞」としても人気があり、見物の人たちを楽しませています。

「赤鬼の面をかぶったおじさんはすごいんだどよ。」

「んだ。戦いのときにバクテン（後転倒立回転）をすんだど。」

速いテンポのお囃子にあわせて、赤鬼と地法の動きが激しくなります。見物の人たちは軽業師のような赤鬼の舞に大きな拍手と賞賛の声を送っています。このときのお囃子（神楽拍子）が、「ジャン、ジャン、ジャガモコジャン」と聞こえるところから、地元では太々神楽を「じゃかもこじゃん」と呼んでいます。厄除けの餅撒きの場面になると、赤鬼と地法が境内に向かって餅を撒きます。境内は餅を拾う見物の人たちで大変賑やかになります。　餅撒きが終わると、

「おらぁ、子どもらぁ、遅い時分だから、はあ家さ帰れ。」

「今年は餅を三つ拾ったど。」

「おらは二つだ。」

など、子どもたちは口々に言い合いながら、拾った餅を大事そうに握って家に帰ります。

六座の神酒（みき）の舞、七座の西之宮大神（にしのみやのおおかみ）の舞、八座の鈿女（うずめ）の舞 、九座の岩戸（いわと）の舞、十座の天照大皇神・戸隠（あまてらすおおみかみ・とがくし）の舞、十一座の猿田彦大神（さるたひこのおおかみ）の舞、最後の十二座の山の神（やまのかみ）の舞でも、豊作の感謝を込めて餅を撒きます。

このように十二の演目から構成されているので、太々神楽は「十二座神楽」

ともいわれています。

そして、忘れてはならないのが、演目と演目の間に奉納される三度の巫女舞（みこまい）です。一座目の舞の後に「幣之舞（へいのまい）」が、四座目の舞の後に「榊之舞（さかきのまい）」が、そして八座目の舞の後に「扇之舞（おうぎのまい）」が奉納されます。巫女舞は、九歳から十二歳までの柿岡地区から選ばれた小学生の女の子四人によって舞を奉納します。舞を見ている地元の幼い姉妹は、私も大きくなったらこの舞台に上がることを夢見ているかのように、じっと巫女舞に魅入られています。

さて、この太々神楽は、今から四百年くらい前の文禄四（一五九五）年に、柿岡城主となった長倉義興（ながくらよしおき）が、長倉家と柿岡領内の武運と繁栄を祈願し、八幡神社を建立したときに伊勢神宮の二十四神楽のうち十二神楽を持ち帰り、この八幡神社へ奉納したのが始まりとされています。柿岡城主であった長倉公も、中秋の月明かりの夜に神楽を愛でながら、しばらくは神代の世界に浸ることができたことでしょう。

柿岡城主の長倉義興は、慶長五（一六〇〇）年、現在の茨城県一帯を治めていた佐竹氏の策略にかかって、三十代という若さでなくなりました。家臣たちは義興公の亡骸を柿岡に引き取って、小倉原にお墓をつくり弔いました。そして、善慶寺の裏手の椎の木の下にも供養塔を建立しました。

現在も小倉原のお墓には、「長倉塚」と呼ばれる高さ二メートルほどのこんもりとした塚があり、その当時の面影を偲ばせています。

作　飯塚　信久

＊一座「国堅之舞」は、本来は伊邪那岐命、伊邪那美命の二神の舞だが、お面をつけない四人が演じる。「早みこ」と呼ばれ、舞台を清めるとともに四方を固める舞となっている。かつては八幡町内に婿入りした男性が行う慣わしだった。

＊二座「老翁之舞」は、天御中主命（あめのみなかぬしのみこと）によって行われる四方固めの舞。剣を持ち、四方を踏み固める。

＊三座「種稼・天狐之舞」は、三部構成。まず天狐が登場。天狐は、自由に一人舞を行う。そこに天種子命（あめのたねがしのみこと）が登場。作神である天種子命は種蒔きを始める。天狐は種蒔きの手伝いをしながら種を食べるしぐさをする。天種子命が仕事を終え退場、再び天狐の一人舞となる。

＊四座「龍神之舞」は、天御柱命（あめのみはしらのみこと）が登場。雨乞いの神として舞う。

＊五座「赤鬼・地法之舞」は、鹿島神宮の祭神で武勇の神である武甕槌命と赤鬼の舞。地法とは、地の掟（法）で、掟を乱す先住民族の象徴である赤鬼を、天孫降臨に先立ち国土を平定したとされる武甕槌命が罰する様を演じる。最後に赤鬼は、武甕槌命に降伏。宝物（餅）をまいて謝る。

＊六座「神酒之舞」は、天児屋根命（あめのこやねのみこと）が演じる。三宝に天甜酒（あめのたむざけ）を二本のせ、神々を慰労するような舞を行う。

＊七座「西之宮大神之舞」の西之宮大神は、事代主命（ことしろぬしのみこと）で、一般には「恵比寿様」として親しまれている。

＊八座「鈿女之舞」は、もともと独立した舞だったが、恵比寿様と天鈿女（あめのうずめ）が道行きの形で一緒に舞う。

＊九座「岩戸之舞」は、天岩戸別命（あめのいわとわけのみこと）が世の中の平穏を願ってゆっくりと舞う。

＊十座「戸隠之舞」は、太陽神である天照皇大神（あまてらすおおみかみ）が弟の素戔嗚命の乱暴な振る舞いに腹を立て天の岩戸に隠れ、世の中が真暗になる。最後には、手力男命（てじからおのみこと）が、岩戸を開き太陽が戻るという有名な日本神話を題材にした舞い。

＊十一座「猿田彦舞」は、天孫降臨の際、露払いとして先頭に立ったことから導きの神として知られる。猿田彦大神（さるたひこのおおかみ）世の中の邪気を払い安泰を願って舞う。

＊十二座「山之神」は、天大山祇命（あめのおおやまつみのみこと）で山を司る。秋の収穫が終わると山に戻り、春になると山から下りて田の神にも火の神にもなるという。最後に五穀豊穣を祝い餅をまく。

＊現在の太々神楽は「八幡町」とよばれる荒宿、西町、上宿、仲町在住人たちだけが保存会員となっています。